

氏名： 高濱 裕子 (TAKAHAMA Yuko)
所属： 人間文化創成科学研究科人間科学系
職名： 教授
学位： 博士 (人文科学) (2000 お茶の水女子大学)
専門分野： 生涯発達心理学・保育学
E-mail： takahama.yuko@ocha.ac.jp

◆研究キーワード / Keywords

葛藤処理方略／比較文化研究／文化差の発生過程／横断研究／縦断研究
Conflict Management Skills in Children / Cross-Cultural Comparative Study /
Emergence process of cultural difference / Cross-sectional study / Longitudinal study

◆主要業績

総数 (6) 件

- ・学術論文 高濱裕子・渡辺利子・坂上裕子・高辻千恵・野澤祥子「歩行開始期における親子システムの変容プロセス：母親のもつ枠組みと子どもの反抗・自己主張との関係」発達心理学研究, 2008,19,121-131
- ・学会発表 氏家達夫・高井次郎・高濱裕子・柴山真琴・福元真由美・坂上裕子・二宮克美・近江玲・島義弘・中山留美子「葛藤処理方略の文化差の発生過程 (1)：研究の概要」日本心理学会第 72 回大会
- ・学会発表 島義弘・氏家達夫・高井次郎・高濱裕子・柴山真琴・福元真由美・坂上裕子・二宮克美・近江玲・中山留美子「葛藤処理方略の文化差の発生過程 (2)：日韓の幼児・児童の葛藤処理方略」日本心理学会第 72 回大会
- ・学会発表 坂上裕子・氏家達夫・島義弘・高井次郎・近江玲・高濱裕子・柴山真琴・二宮克美・福元真由美「葛藤処理方略の文化差の発生過程 (3)：親子間の葛藤処理方略の日韓比較」日本心理学会第 72 回大会
- ・学会発表 高濱裕子・北島莉佳「3歳から就学期までの環境移行と社会化プロセス (2)：幼稚園・保育所で子どもが学ぶこと」日本発達心理学会第 20 回大会

◆研究内容 / Research Pursuits

「3歳から就学期までの環境移行における社会化・文化化についての追跡的研究」

(科学研究費補助金 B：研究代表者)

研究プロジェクトの目的は、①3歳以降の対人調整力の発達を追跡的に検討し、わが国の乳幼児の自律性の変化や家庭における社会化の実情を把握すること、②子どもの活動と幼稚園環境との関係の分析を通して、幼児教育の特質を明らかにすることである。主な結果は、①親が就学前施設に期待する内容が大きく変化したことが明らかになった。幼稚園・保育所で子どもが学ぶ能力として、第1位に「コミュニケーション能力」があげられた。②入園当初には慎重さや躊躇ともみられる「動けなさ」が観察された。人や事物への関わりは、教師の仲介や促しによって出現する場合が多かった。子どもにとっての新奇な環境である集団のもつ意味を考慮する必要がある。

「葛藤処理方略の文化差の発生過程についての比較文化的研究」(科学研究費補助金 B：連携研究者)

第一次反抗期以降、家庭での社会化や就学前施設(保育所・幼稚園)および小学校での文化化の結果として出現すると予想される処理方略の文化差を検討する。発達過程に焦点化した比較文化的研究は、おそらく本研究が世界で初めてのものである。2008年度は、2007年度の横断研究に引き続いて、日本、中国および韓国において、3歳児のコホートと5歳児のコホートそれぞれ50名を対象に縦断研究を開始した。内容は、家庭訪問による親への面接、親子課題、子ども課題であった。

Longitudinal study of socialization and culturalization through environmental transition from 3 years old to period of entering school.

There were two purposes of our research.

First, the development of the personal adjustment skill since three years old was followed up, and the realities of parents' socialization and the change of children's autonomous in Japan were clarified. Secondly, the characteristic of the preschool-education was clarified through the analysis of the relation between the child's activity and the kindergarten environment.

A cross-cultural comparative study of the development of conflict management skills in children.

We began the longitudinal research in Japan, China, and South Korea in 2008.

In each country, 100 parent-child dyads participated in total, the ages of children were three years old and five years old. The contents of the investigation were the interview to parent, the parent and child task, and the child task, and those were done by the home visit.

◆教育内容 / Educational Pursuits

学部教育では、前期に「生涯発達講義講読」、後期に「発達過程論」を担当した。

これらの授業科目においてとりわけ意識した点は、親や大人から見る（とらえる）という視点である。とすると、乳幼児、児童、生徒側から見たりとらえたりすることが多い。しかし、養育する側からの見え方やとらえ方を知ることで、発達の相互影響性、互恵性に気づくことになる。

大学院前期課程では「親子関係論特論」「親子関係論演習」および「保育者養成論特論」を担当した。

「親子関係論（特論・演習）」では、システム論的観点をもちつつ、愛着理論（ボウルビィ）や生涯発達心理学に関わる理論（エリクソン）を基礎的な理論と位置づけて概説した。さらに、『発達心理学研究』『教育心理学研究』などに掲載された親子（大人と子ども）関係を扱った論文を取りあげ、各研究の理論的背景を紹介しつつ、論文執筆の所作、批判的に検討する視点などを重視しながら授業を進めた。後期は社会学的視点をもつ内外の論文を材料にして、各院生の研究テーマとの接点を探った。

「保育者養成論特論」では保育者（幼稚園教諭や保育所保育士）の養成やその専門性や専門性を支えるさまざまな資源について、内外の文献講読を通して検討した。またデータ分析の実際を、幼稚園教育に関するビデオを教材にし、KJ法を使って体験させた。受講生はカテゴリの生成、集約そして統合といったプロセスをへて、自分の分析結果を発表した。

I taught 2 undergraduate courses in this school year. The points that I especially considered were the adaptability and the mutual influences of human development. These aspects run to knowing the mechanism of human development.

I taught 3 graduate courses in this school year. I valued making students study some basic theories because there were a lot of students who had various backgrounds in this course. Additionally, I aimed to acquire the ability that they critically read the journal thesis.

◆研究計画

比較文化研究は、その文化差を明らかにすることを目的とした研究から、状況や文脈による違いに着目した研究へと変化している。さらにわれわれが目指すのは、文化差がどのように生み出されるかといったプロセスへ焦点化した研究である。2年前からは、日本、韓国、中国そしてアメリカの幼児から小学生までを対象とした「対人葛藤処理方略の文化差の発生過程についての比較文化的研究」に着手した。さらに文化差の発生過程をとらえるべく、日本、韓国そして中国の3か国における縦断研究を開始している。データセットの規模が大きいため、多様な分析が可能であると考えられる。

人間の発達を、より長期的なスパンを射程に入れて追跡し、発達のメカニズムを解明したいと思う。乳幼児期、幼児期、学童期、思春期といったある特定の時期の変化だけを見てはわからない、生涯を通じた人間発達の連続性や変容のパターンについての検討が必要である。このことが、生涯発達心理学の構築につながると考えられる。

◆メッセージ

現代社会におけるさまざまな課題を、発達心理学的な視点をもちつつ検討したいと考えています。

親や保育者などの成人発達のメカニズムには、まだよくわからないことがあります。家庭や幼稚園・保育所などのフィールドに関与しつつ、対象を長期的に追跡するアプローチを採用しながら解明したいと思っています。

また、私たちはいかなる道筋をたどって日本人になってゆくのかという疑問を解明するために、日本、韓国、中国そしてアメリカとの比較文化研究を開始しました。社会・経済的変化が、親になるプロセスや家庭の養育機能にどのような影響を与えているのかを、東アジア諸国との比較によって明らかにしたいと思います。